

オウへau || aWへ島から粟島へ 粟・雑穀霊の常世への跳躍

菅田正昭

「粟島」「淡島」は、記紀の国生み神話でも中心的な位置を占めており、「常世の国」への入り口、常世へ飛躍する島としてもまた重要である。伊雑宮の鎮座する志摩國答志郡も粟嶋であり、久高島の祭祀でも粟の靈性は際だっている。常世の豊饒を取り戻すには、この弧状列島全体の粟霊への回帰が必要ではないか。

記紀神話でとりわけ重要な位置を 占めている粟島や淡島

奥（澳 || 沖）・大・青…等々の意と、オウの音韻を持つコトバの祖語が〈au〉、あるいは〈aw〉、または〈ah〉である可能性については、すでに論じた（註1）。そこに〈a〉という音韻が付くと、〈アワ〉あるいは〈アハ〉になる。漢字で記せば「粟」「淡」…等々である。

オウから派生した音韻を冠する島々の中でも、粟島や淡

島は、特別の意味を持っている。記紀神話の中でも、とりわけ重要な位置を、神話空間の中に占めている。なぜなら、いわゆるイザナギ、イザナミの〈国土生み〉神話の中でも、〈アハ || アワ〉島を抜きにして「修理固成」^{すりこせい}を考えることはできないからである。

よく知られるように、ギ・ミ両神の夫婦^{めをとまへあひ}交合で最初に生まれたのは、「子の数」には入れられなかった「水蛭子」と「淡島」^{註2}だった。武田祐吉^{註3} 訳註『古事記』（角川文庫、昭和三年初版）によれば、「淡島」は「四国の阿

波の方面の名。この部分は阿波方面に對してわるい感情を表示する」とあるが、ギ・ミの二柱の神が天上から降り立ったという、オノゴロ島を含めて、いわゆる〈国土生み〉神話の舞台が淡路島の周辺だったことを考えると、この角川版の注記は成立しないであろう。事実、夫婦交合をやり直しての、両神の「子」としての「大八島國」の「始め」は、「淡道の穂の狭別島」である「淡路島」であるからだ。そして、その次に生まれたのが、「伊豫の二名島」、すなわち四國である。「この島は身一つにして面四つあり。面ごとに名あり。故、伊豫國を愛比賣といひ、讃岐國を飯依比古といひ、粟國を大宜都比賣といひ、土左國を建依別といふ」(『古事記』上つ巻)とある(註4)。のちの愛媛の県名はこの愛比賣から生じたものだが、エヒメの兄は「兄」＝長子の意である。四つの面はイザナギ、イザナミが生んだ子(島)として、それぞれ神名を持っているわけだが、エヒメという名から伊豫が四國の長子ということになるだろう。

粟霊のみならず 農業全体の守護神だったオホゲツヒメ

ここで注目しなければならないのは、讃岐國の神名の飯依比古と、粟國の大宜都比賣である。すなわち、飯と粟が対応していることである。このことから四國(伊豫の二名島)

では粟飯を食べていたことが推定できる。『古事記』編纂者が阿波地方に對して好くないイメージを持っていたとするならば、米飯を食っている者の粟飯に對する優越感に発しているのかもしれない。しかし、ギ・ミの御子としての国土の「始め」が淡路島(淡道の穂の狭別島)であり、さらに、淡道＝淡路が「粟國」へ至る海道の義であることを考えると、記紀神話の「アハ・アワへのイメージには、飯の「始め」としての粟への郷愁と、「淡島・淡道の二名島・粟國」が古代の海上交通の要衝だった(註5)ことを暗示しているように思える。

しかも、粟國の大宜都比賣という神名じたいが穀物霊の象徴的存在だったという可能性を問える。というよりも、オホゲツヒメは穀物霊を超える古代の産業神や、生命力の神としての神格を持っていた。『古事記』には、高天原を「神逐らひに」追放されたあと、出雲國の肥の河上の鳥髪へ降り立ったスサノヲを描いた段の冒頭の、食べ物を求めたスサノヲが、オホゲツヒメが鼻・口・尻からご馳走を出したことから「穢汚」ものを出したと怒って殺した、という角川文庫では「穀物の種」、岩波文庫では「五穀の起源」と名付けられた挿入神話の中に、次のように登場してくる。「また食物を大氣津比賣神に乞ふ。ここに大氣都比賣、鼻口また尻より、種種の味物を取り出して、種種作り具へて進る時に、速須佐之男命、その態を立ち伺ひて、穢汚し

て奉進るとおもほして、その大宜津比賣神を殺しき。かれ、殺さえし神の身に生れる物は、頭に蠶生り、二つの目に稲種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麦生り、尻に大豆生りき。かれ、ここに神産巢日御祖命、こを取らしめて、種と成しき」

すなわち、オホゲツヒメは単なる粟霊ではなく、稲・粟・小豆・麦・大豆や、そして養蚕を含めた農業の守護神だったことがわかる。ふつう、五穀というのと、『広辞苑』によれば、米・麦・粟・豆・黍または稗を指すが、オホゲツヒメの粟國のアハは五穀や、ソバなどの他の雑穀を総称した豊饒性の象徴としての「粟」だったと考えてもよい。粟國へ至る淡道＝淡路の周縁の地域に、吉備国や小豆島が配置されているのも、「粟」の霊性に発していると思われる。

常世への入り口として

霊的な位置をしめしている粟島

日本人にとって米飯は特別な意味を持つが、シマ（島）の霊性を考えるとき、コメだけに捕らわれてはいけけない。ヤミノイモやサトイモなどのイモ類（註6）、椎の実・栃の実などのドングリ類も、オホゲツヒメの守護の対象であったかもしれない。神の死体から新たな神や穀物などが誕生するという神話は、記紀のカグツチや、紀のウケモチ

（保食）の神（オホゲツヒメと同一神ともいう）などが例に見られるが、このオホゲツヒメの神話には焼畑農業のイメージが投影されている、といわれている。

記紀には他の場面にもアハ島が出てくる。たとえば、『古事記』には、仁徳天皇が淡道嶋へ行幸されたときに詠まれたとされる、つぎの御歌が載っている。

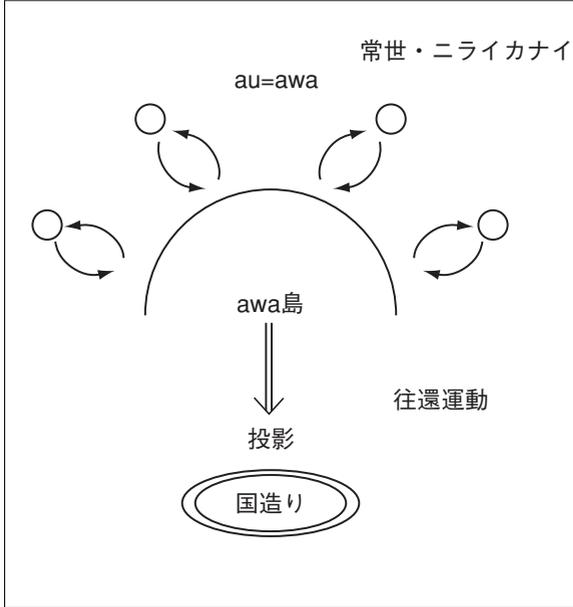
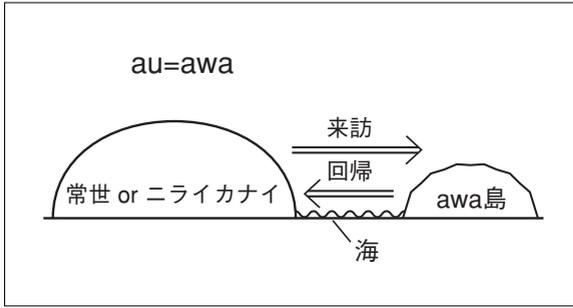
「おしてるや 難波の埼よ 出で立ちて わが國みれば
阿波志摩 淤能碁呂島 檳榔の 島も見ゆ 佐氣都島も見ゆ」

「おしてるや」は難波に懸かる枕詞で、海が照り輝いている光景をあらわしている。「阿波志摩」は角川文庫では「粟島」、岩波文庫では「淡島」と表記されている。イザナギ・イザナミが降り立ったヲノゴロ島が詠まれていることや、御製の背景となっている地理を想像すると、「子の数」に入れられなかった「淡島」の可能性が強いが、これらの島々が仁徳天皇の眼前で実際に展開されていたかどうか、ここでは問題ではない。なぜなら、この歌は『古事記』の文脈では、仁徳天皇の国見の歌であり、天皇が知らしめずシマジマを、御自ら寿いだものだからである。いずれにせよ、ここでの「阿波志摩」は、「粟島」＝「淡島」ということになる。

『日本書紀』には、もっと魅力的な「淡嶋」が出てくる。すなわち、『日本書紀』神代上・第八段の第六の一書の、

「大國主神、亦の名は大物主神、亦は国作大己貴命」が少彦名命と国作りを終えたあと、少彦名命が出雲国意宇郡の熊野（鳥根県松江市八雲町熊野）の御碕（地形が突出した部分）から常世郷へ出かけたという条に、次のように記されている。

「亦曰はく、淡嶋に至りて、粟莖に縁りしかば、彈かれ渡



りまして常世郷に至りましきといふ」（坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀（二）』岩波文庫、平成六年）
 岩波文庫版『日本書紀』の「注」によれば、「鳥取県米子市に上粟島・下粟島の地名を伝える」として、この「淡嶋」を同所に比定している。それは「釈日本紀（巻七）所引伯耆風土記」すなわち『伯耆国風土記』逸文「粟嶋」条に、次のように出てくるからである。

「伯耆の國の風土記に曰はく、
 相見の郡。郡家の西北のかた
 に餘部の里あり。粟嶋あり。少
 名日子命、粟を蒔きたまひしに、
 莠實りて離々りき。即ち、粟に
 載りて、常世の國に彈かれ渡り
 ましき。故、粟嶋と云ふ」（秋
 本吉郎校注『風土記』岩波・日本古
 典文学大系2、昭和三十三年）

同書の「注」によれば、この「粟嶋」は神代紀一書の「淡島」と同じで、「夜見浜の西南部、米子市彦名の粟島。もと島であった。出雲国風土記に見える（二二二頁）」と記されている。

たしかに、『出雲國風土記』意宇郡の該当箇所を見ると、「粟嶋 椎・松・多年木・宇竹・眞前等の葛あり」とあり、その「注」には「安来市の対岸、米子市彦名の粟島之地」とも島であった」と記されている。出雲國意宇郡の熊野山（島根県松江市八雲町熊野）から伯耆國相見郡の粟島（鳥取県米子市彦名町一四〇四に粟嶋神社が鎮座）までは西へ約二〇キロほど離れているが、出雲國側の島根県安来市と伯耆國側の鳥取県米子市彦名町とは中海を隔てて二キロほどの至近距離である。しかし、『出雲國風土記』と『伯耆國風土記』逸文の「粟嶋」が同じ島を指しているのかどうか、は定かではない。米子市の粟嶋神社の鎮座地は地形図を見ると、たしかに島の面影を残しているが、もしかすると、米子市の側のオウの海にも粟粒のように小さな粟島があった可能性も捨てきれない。ちなみに、『出雲國風土記』の「嶋根郡」にも「粟嶋 周り二百八十歩、高さ一丈なり。松・芋・茅・都波あり」があつて、岩波版『風土記』は「黒島の西南方。青島」と注記している。これは現在の島根県松江市美保関町七類物津の玉結湾の青島にあたる。

そして、ここで注目しなければならないのは、スクナビコナの相貌である。紀一書（神代上・第八段）によれば、大己貴神（＝オホクニヌシ）が海上に浮かぶ「一箇の小男」である

すがたままさき
菅田正昭



昭和20年東京生まれ。学習院大学法学部卒業。同46年から49年まで東京都青ヶ島村役場職員、平成2年から5年にかけて同村助役を務める。主著に『日本の島事典』（三交社）、『アマとオウー弧状列島をつらぬく日本の靈性』『隠れたる日本靈性史』（たちばな出版）、『古代技芸神の足跡と古社』（新人物往来社）、『第三の目』（学習研究社）ほか多数。現在、自身のホームページ「でいらほん通信」で独自のシマ論を展開している。

スクナビコナに遭遇したとき、高皇産靈尊の「指間より漏き墮ち」るほど小さな神だったスクナビコナは「白薮の皮を以て舟に為り、鵜の羽を以て衣にして、潮水の随に浮き到る」という出で立ちであった。一方、『古事記』では「波の穂より天の羅摩船に乗りて、鵜の皮を内剥に剥ぎて衣服にして、歸り来る神」として描かれている。

カガミ（白薮＝羅摩）の船とはガガイモの実を二つに割って作った船のことで、その袋果には白毛が付いている。鵜は蛾の誤りともいわれているが、要するに、スクナビコナの相貌は蛹の状態の昆虫である。稔った粟の茎に上ったあと、その茎に弾かれるようにして常世へ跳んでいく姿は、飛蝗の面影も有している。『日本書紀』皇極天皇三二（六四四）年秋七月条には、東国の不盡河（現在の富士川）の辺に住む大生部多という人が、虫を常世の神として祭るという新興

宗教を始め、人心を惑わしたということ、中央から派遣された秦河勝（はたのかはかつ）に滅ぼされたという事件が記載されているが、その常世虫（幼虫時代はカイコに似ている一種の蛾であったらしい）も彷彿とさせる（註7）。いずれにせよ、粟島は常世へ到る入り口、あるいは、常世へ飛躍する島としての霊的な位置を示している、と考えられる。

伊雑宮の 鎮座する志摩國答志郡も「粟嶋」

そこで、つぎに、その他の「アワ・アハ」島を概観しておこう。

▽粟島Ⅱ新潟県岩船郡粟島浦村。『義経記』巻七に「義経あをしまの北を見給えば、しら雲のやまこしこへて……」とある「あをしま」がこの粟島だと考えられている。出雲國嶋根郡の粟島が青島へ変化したように、青島（青ヶ島を含めると全国一六ヶ所）と粟島は音韻的にも深い関係にあると思われる。

▽粟島Ⅲ香川県三豊市詫間町粟島。日本で最初の海員学校（明治三〇年〜昭和六二年）が開設された島。少彦名神を祀る粟島神社が鎮座。

▽淡島Ⅱ静岡県沼津市内浦重寺。あわしまマリナーパークがある。標高一三七メートルの山頂には淡島神社が鎮座。もともとは岩石を切り出した石切りの島だった。

実は、粟島・淡島はこれらの三つだけである。しかし、『延喜式』神名帳を見ると、ひじょうに重要な「粟嶋」が存在する。すなわち、「志摩國答志郡 粟嶋坐伊射波（かみのやしほ）神社 二座並大（みな）」同 嶋坐神乎多乃御子神社」の二社に冠せられた「粟嶋」である。

前者の神社が三重県志摩市磯部町上之郷（かみのこう）に鎮座する志摩國一宮で皇大神宮別宮の伊雑宮、後者が同じく磯部町恵利原（りはら）の伊雑宮所管社の佐美長神社である。ちなみに、伊雑宮は天照皇大神を捧持した倭姫命が伊勢國に入る直前、アマテラスを祀った聖地である。このため、伊雑宮は内宮・外宮に次ぐ第三番目の神宮だとする説もあるほどだ。

伊射波も磯部も伊勢も岩礁を意味する語根（い）から発した同源の語であり、志摩國の志摩がまさにシマ（島）を意味するように、伊雑宮の鎮座地は「粟嶋」だったのである。『伊勢國風土記』逸文の「伊勢國號」によれば、「神風の伊勢の國、常世の浪寄する國」だが、志摩國もほとんど同じ地理的条件であったはずである。おそらく、稲作以前の記憶と常世浪が寄せる、まさに志摩國答志郡は「粟嶋」だったのである。粟島の靈性を付着させることによって、アマテラスは伊勢に鎮座することができたわけである。

「粟」の靈性が 際立つ久高島の祭祀

ところで、稲作といえは、日本神話の文脈からいうと、アマテラスが皇孫ニニギに授けた稲種に発している。そして、この稲種は粟國の別名を持つオホゲツヒメの二つの目に生なったものである。ちなみに、紀（神代上・第五段）一書（第二一）によれば、保食神の頂に牛馬、額に粟、眉に蠶、眼に稗、腹に稲、陰に麦および大小豆が生っている。いうならば、稲作も粟嶋の靈性に発しているといえなくもない。

わが国では、天皇陛下の一世一代の御親祭Ⅱ大祭である大嘗祭を始め、宮中の新嘗祭、伊勢神宮の神嘗祭など、アマテラスからニニギに授けられた稲種で米作りをし、そこで得られた新穀を神々へ捧げて、神々と共食するという神話的時空の再現を祭礼として行ってきたわけである。しかし、沖縄の、かつての琉球王朝ではその趣を若干、異にしていた。琉球王朝の場合、王権儀礼の象徴として麦がクロームアップされているからである。すなわち、「かつて（琉球）国王は自ら毎年（久高島）渡島し、麦の（穀霊）を身に憑けるべく、麦のミシキヨマ祭祀を行った」（註8）という。

しかし、小山和行氏自身も指摘しているように、イザイホーが途絶した現在の久高島でも厳修されているという、

ノロが司祭する「一月 麦の初穂祭り」「三月 麦の収穫祭り」「五月 粟の収穫祭り」「六月 粟の収穫祭り」という記述からは、むしろ粟の靈性のほうが際立って見えてくる。那覇の北西約六〇キロにある粟國島（沖縄県島尻郡粟國村）は、「かつては粟の産地として知られ、粟島とも呼ばれていた」（註9）という。その粟が食べられないとき、ソテツ地獄のシマチャビ（島荒び）となったわけである。沖縄の離島では粟が大切な穀類だったはずである。ヤマトウの米、ウツナーの麦の以前は、どちらも「粟」だったはずである。

焼酎の泡盛は現在では米から造られているが、アワモリという音韻から古くは粟を原料にしていたとも考えられている。その語源には諸説があるらしいが、「粟」は有力な説である。そして、もっと古くは椰子の実から造られていたともいう。

常世の豊饒を取り戻すには 弧状列島全体の粟霊への回帰が必要

ここで、仁徳天皇の例の国見の御歌を想い出してみよう。「阿波志摩」を「粟島」、「檳榔」を「椰子の樹」一般と捉え、「佐氣都島」を「放つ島」（離島の義）ではなく「サケ（酒）つ島」と読み換えることもできる。もちろん、この場合の酒は、焼酎（蒸留酒）ではなく醗酵酒である。『古事

記」仲哀天皇の「酒楽の歌曲」条には、「この御酒は、わが御酒ならず 酒の長(司) 常世にいます 石立たす 少名御神の……」という歌が載っている。つまり、これらの島々は、常世神スクナビコナが管轄する酒の象徴、いいかえれば、常世の豊饒性を示している、というふうにつまえることも可能だ。

久高島のノロが司祭する祭りの中の麦・粟は豊饒性の象徴である。ノロはその豊饒性を確保するため祈るわけである。沖繩では「命どう宝」「物食ゆすどう我が主」という格言がしばしば使われるが、王権にとっては人民を飢えさせないことが統治だったわけである。

『おもしろさうし』を見ると、按司(領主の意。王家の近親が多い)の下に「襲」という字が付くことがある。沖繩学の創始者の伊波普猷(二八七六―一九四七)によれば、浦添という地名は「浦添のようどれの碑文」に「うらおそい」(漢字をはめると「浦襲」となる)とあるように、「浦添の名称が浦々を支配する所という意味」「古琉球」所収「浦添考」である。すなわち、伊波普猷は「おそい」を「支配する」の意であると捉えている。結論的には、この説は正しいが、「襲ひ・襲ふ」は「不意に攻めかかる。不意に人に危害を加える」「おびやかす」(広辞苑)の義である。いわゆる襲撃である。

『おもしろさうし』第一―3に「鳴響む精高子が 聞え按司

襲ひ 鳴響む按司襲ひ」という詞が出てくる。外間守善氏の校注によれば「鳴響む精高子 聞え大君の異称。『鳴響む』は美称辞。『精高子』は霊力豊かな人」ということになるが、「鳴響む」は現代語「どよめく」と同源で、まさに名声が鳴り響くことである。「聞え」は琉球王朝の最高神女の聞得大君のキコエと同じく(神の声を聞くことができること)である。つまり、按司や国王も聞得大君ほどでなくとも、統治者には、本来は、そういうセチ(霊力)が求められたわけである。外間氏によれば、「按司襲ひ 按司たちを守護し支配する大按司の意で、国王をさす」とあり、「襲ひ」を「支配」の義で捉えている。

もちろん、琉球王はミヤークヤ、ヤエマの島々を文字どおり襲って支配している。しかし、「襲ひ」には「着物をかさねて着る」(広辞苑)、すなわち装いの絢爛豪華さの意味合いもあるが、「襲」という漢字を使うと、その好戦性が浮かび上がってしまう。王権の暴力装置の権化としての国王・按司が突出してしまう。「物食ゆすどう我が主」という、ウツナーの民が発する「神の声」を聞き、政策として樹ち出していくためには、まず「食物」を確保しなければならぬ。ヤマトウの古語では、ヤマトのことをラス(食)国といい、食物のことをラシモノという。このラス・ラシとラサムル(治むる)のラサとは同源である。当然、沖繩のオソヒ(襲ひ)も、本来はラソヒ(ラソはワサの音

転で早稲・早生、ヒは穂・飯の義?)であつたかもしれないのである。琉球王朝は麦の靈性のほうを重視するあまり、粟の靈性を少し疎かにしてしまつたのではないだろうか。常世の、ニライカナイの豊饒な靈性を取り戻すためには、弧状列島全体が粟霊へ回帰して付着させなければならぬのである。粟粒のごとき小さな島に、もつと目を向けなければならぬのである。

スクナビコナの粟島は「意字」あるいは「相見」の、まさにオウあるいはアフの海の中にあつた。しかも、スクナ

ビコナの相貌は、穀類にとつては害虫であつたかもしれない可能性を残している。そのスクナビコナがおそらく粟島を拠点として「国作り」を手伝っているのである。粟の靈性を帯び、オウ・アウの原点へ回帰すると、害虫―益虫という概念も無化され、穀物霊へと昇華されるのである。■

(註釈)

- 註1..本誌二三号の「オウ周辺の島名の音韻関係図」を参照。
註2..この淡島は紀伊半島と淡路島との間にある友ヶ島を構成する神島に比定されている。和歌山市加太の加太淡嶋神社はそこから遷座したものといわれている。詳しくは本誌二一六号の拙稿「海の視座から見る〈国生み〉神話」を参照。
註3..武田祐吉(一八八六―一九五八)は国文学者。古典の監修・校訂を多く引き受けたが、弟子の生活を支えるため、作業を任せたといい。民俗学者・折口信夫(一八八七―一九五三)の盟友。
註4..『古事記』の引用は、原文を参考に角川文庫と岩波文庫の訓読文の中間を採用している。以下も同じ。
註5..本誌二一八号の拙稿「海と島の道」の視点からの道州制」の六八―六

九頁を参照。

- 註6..坪井洋文(一九三三―八八)『イモと日本人―民俗文化論の課題』(未来社、一九七九年)。非水田稲作民の文化要素を、儀礼食物としてのコメ以外の食物を通して分析した画期的な著作。
註7..拙著『秦氏の秘教』(学研パブリッシング、二〇〇九年)の第8章「常世の虫と河勝」を参照。
註8..浅見克彦・山本ひろ子編『島の想像力―神話・民俗・社会』(岩田書院、二〇一〇年)所収の小山和行「琉球王朝儀礼と久高島―その生命力と〈麦の初穂〉―」。
註9..日本離島センター編集・発行『日本の島ガイド』SHIMADASI 二〇〇四年版。